

## 独仏の歴史と文化のなかのケール

松尾早苗

**要旨：**ライン川沿いの国境の町ケールが独仏の歴史と文化の錯綜した関係のなかで辿った歴史、またこの町が独仏に対して果たした歴史的、文化的役割をおもに文学作品の記述に基づいて、次の11の視点から考察している：1. 独仏の国境としてのライン川の意義、2. 自由主義者のライン渡河と革命思想の「積替え地」、3. ネルヴァルにおけるライン川とケール、4. 出版と密輸の町ケール：ポーマルシュの城塞内印刷所と出版事業、5. ライン川をめぐる独仏の文学的抗争、6. 第一次世界大戦終結後のケール：戦争の犠牲者、7. ナチス治下のケール：ナチスゆかりの道路（広場）名、8. ケールとストラスブールの反ナチ集団、9. ケールでのナチの焚書、10. ケールにおける「独仏の演劇戦争」、11. 第二次世界大戦後のケール。これらの考察から、領土的境界は地理、歴史、宗教にも関係しているがゆえに政治的に重要視されるが、民衆の意識や文化、経済活動ではかならずしも絶対視されず、むしろ人間の交流や文化活動はそうした境界を越えて流動し、発展してゆく可能性を秘めていることを明らかにしている。

バーデン地方の小都市ケールが史的文献に現れるのは、ようやく1299年になってからである。それ以後14世紀半ばまで、この町はライン左岸の古都ストラスブールの陰に隠れて、とくに話題にのぼることもない漁村であった<sup>1)</sup>。しかし、ライン川を挟んでストラスブールと真向かいに位置するという、地理的な独自性から、やがて独仏の波乱に富んだ歴史的関係のなかで特異な運命を辿ることになった。すなわち、ライン川に橋が架かり、それによってケールがストラスブールとほぼ同等の地政学的な意味をもつようになったことから、幾度となく境を越えたりは独仏の戦争に巻き込まれ、破壊され、しばしば支配者も変わった。しかし、他方で、その橋によって早くからストラスブールと密接に結びついたことから、ライン川沿いのドイツの他の小都市には見られないような意義深い発展を経験することもできた。実際、ケールは17、18世紀にはストラスブールの商業活動の一翼を担った。それに伴って、同市のライン橋も次第に整備され、上ラインで最も重要な橋になった。

現在、ドイツからライン川を渡ってフランスへ入る場合、ケールとストラスブール間のライン橋を渡る以外に、アルザスの北部と南部の数カ所に架かるライン橋を渡る方法もある<sup>2)</sup>。しかし、最もよく利用されるのは、ケールとストラスブール間のライン橋である。実際、1960年に架設された、その「ヨーロッパ橋」(Europabrücke)は、現在、年間に約2,000万人のヨーロッパ人が国境を越えるために渡っているのである。

しかしながら、この橋のドイツ側のたもとであるケールは、ドイツでもストラスブールへ行く途中のたんなる通過地点としてしか見られておらず、ドイツの地域研究で取り上げられることはまれである。それゆえに、ケールの歴史や文化について記した書物や文献資料はきわめて少ない。このような事情から、本稿では、ヴォルターズドルフの著した『読書家のストラスブール』<sup>3)</sup>をもとに、文学者の紀行文や小説に描かれたケールの姿を読み解くことによって、独仏の歴史と文化のなかでケールが辿った歴史、この町が独仏に対して果たした文化的役割と意義を明らかにしたい。

## 1. 独仏の国境としてのライン川

ルイ十四世が行った侵略戦争の一つであるアウクスブルク同盟戦争は、レイスウェイク条約の締結で終結をみたが、その条約ではライン川が独仏の国境として確定されていた。この確定が、1697年以降、ヨーロッパ各国で承認されていたことは、たとえばゲーテが「ある目覚ましい国家的事件」と語ったマリ・アントワネットのライン渡河にも知ることができる。すなわち、ゲーテは留学先のストラスブールに着いて間もない1770年5月7日に、マリ・アントワネットがパリへ輿入れする途次にライン川を渡る場面に出会った。そのとき、ケールとストラスブール間のラインの中州の一つに木製の建物が造られたが、それは、ゲーテの以下の記述にあるように、国境としてのライン川に細かい配慮をした構造になっていた。

…ある目覚ましい国家的事件が何もかも動揺させ、私たちにかなり長い休暇を与えてくれた。オーストリアの大公女で、フランスの王妃となったマリ・アントワネットがパリへの途次、ストラスブールを通ることになった。…この際、とりわけ私の注意を引いたのは、このフランス王妃を迎えて、夫王の使節の手に渡すために、二つの橋に挟まれたラインの中州に造られた建物であった。それは地面からほんのわずかに高くなっていて、中央に大広間があり、その両側にやや狭い部屋があって、それに続いていくつかの部屋が奥へと伸びていた<sup>7)</sup>。

その「事件」については、ツヴァイク（Stefan Zweig・1881-1942）も次のようにさらに詳細な報告を残していた。

ケールとストラスブールに挟まれたライン川の中州は、ヴェルサイユとシェーンブルンの廷臣たちが最後の切り札として考え出した場所だった。花嫁を天下晴れて引渡す儀式は、オーストリアの領域内で行うべきか、それともフランス領に入ってからすべきか、果てしない議論を重ねたあげく、ソロモン王にも劣らぬ一人の知恵者が解決策を見出した。つまり、フランスとドイツの間を流れるライン川、人の住まない小さな砂州のひとつ、すなわち無人島に、引渡しの儀式のための木造建物を造るというのである。中立精神の奇蹟というべきもので、ライン右岸に面して、アントワネットがなおオーストリア皇女として入る控えの間が二つ、さらにライン左岸に面して二つの控えの間があって、彼女がここを離れるときにはフランス王太子妃になっているという次第である。そして、その中間に引渡し式用の大広間があって、ここで皇女は最終的にフランス王位継承者の妃に変身するのである<sup>8)</sup>。

ちなみに、ラインの中州（Rheininsel）は、流路の一本化工事が実現する19世紀半ばまでは、バーゼルの下流からカールスルーエの上流の間に数多く存在していた。すなわち、右岸のシュヴァルツヴァルトと左岸のヴォージュの両森林丘陵の間に達する上ラインのあたりでは、野性ラインの流路はいくつにも枝分かれしていた。そして、枝分かれした流路は所々でラインの一体性を示すかのように相互に連絡し合っていた。はなはだしい場合は、分流と合流が9キロメートルにもわたって繰り返されていた。流路は洪水のたびに変化し、新しい枝分かれが生じたが、流路にならなかった所は中州となったのである<sup>9)</sup>。

ケールとストラスブール間のライン川には、1388年に最初の木製の橋が架けられたが、それはそうしたいくつもの中州をまたいで架かっていた。その後、その橋は度重なる戦争で何度も部分的に破壊し、その都度、改修され、1797年に洪水で最終的に沈没するまで独仏間の交通の要所として機能した。

## 2. 自由主義者のライン渡河と革命思想の「積替え地」

19世紀における独仏間の往来に関して注目されることは、1830年代にドイツの自由主義的な作家や知識人がフランスを目指してライン川を越える傾向が顕著だったことである。彼らは、1789年の大革命とその後の七月革命に触発され、自由と平等の国フランスを憧憬して、ケールとストラスブール間のライン橋を渡ったのである。

たとえば、ルートヴィヒ・ベルネ（Ludwig Börne・1786-1837）は1830年秋にパリへ赴く途中でこのライン橋を渡った。彼は本名をレーフ・バルフ（Löw Baruch）と称し、フランクフルトのユダヤ人街で育った。ユダヤ出自のために、ウィーン会議後の反動化の波をもろに受け、休職に追い込まれたあと、彼が発行していた『秤』誌に発表した論文が原因で弾圧を受けた。結局、彼はすべての希望をフランスでの新しい生活にかけてパリへ旅立ったが、ライン川を渡るときに独仏の間で揺らいだ自らの複雑な心情を次のように記した。

フランスの帽章を、ストラスブールから来てケールで私のそばを通り過ぎた一人の農夫の帽子に初めて見た。それを見て、私の心は熱くなった。それは、我々の日々の洪水のあとに現れた小さな虹のように、怒りの静まった神の平和のしるしのように思われた。ああ！三色旗が私に向かって照り輝いたとき、それは言葉で言い表せないほど私の気持を高揚させた。心臓は病気になるばかりに激しく打ち、涙だけが感激に震える胸を静めることができた。愛と憎、歓喜と悲哀、希望と不安が漠然と入り混じっていた。勇氣は悲哀を、悲哀は勇氣を制することができなかった。それは終わりなき、平和なき闘争だった。その旗は、橋の真ん中でフランスの地に立つ棹で掲げられていた。しかし、旗布の一部はドイツの空でひるがえっていた<sup>7)</sup>。

ベルネがライン川を越えて間もない1831年5月に、彼の盟友ハイネもパリへ向かうために、その同じライン橋を渡った。ハイネの場合、次の記述にあるように、国境のライン川を中立的存在というよりも、むしろきわめて親仏的な川として捉えていた。

1831年5月1日、私はラインを渡った。古い川の神、父なるラインを私は見なかった。そして、私はその水のなかへ私の名刺を投げ込むだけで満足した。言伝えによると、その神は川底深くにいて、マイディンガーのフランス文法をふたたび勉強しているということだった。つまり、プロイセンの領有になっていた間に、フランス語がひどく下手になってしまったので、場合によっては、最初から勉強しようとしていたのだ。川の神が川底でフランス語の動詞の変化を練習しているのが聞こえるような気がした、J'aime, tu aimes, il aime, nous aimons と。でも、川の神が愛しているのは何だろうか？断じてプロイセン人ではない。ストラスブールの大聖堂を私はただ遠方から見た<sup>8)</sup>。

なお、自由主義的な作家や知識人がこのライン橋を渡るとき、その手荷物のなかには反国家的な思想を説く著作がしばしばしのぼされていた。それゆえに、兩岸の税関では入念に所持品検査が行われていた。このような状況から、つねに検閲に悩まされ、検閲と闘っていたハイネは、「旅に出るとき、私は密かに持ち出そうとする物を頭のなかに入れる」と語っていた<sup>9)</sup>。

実際、このライン橋は、次に挙げるビューヒナー（Georg Büchner・1813-1837）の体験に認められるように、革命思想の「積替え地」となることがしばしばあった。すなわち、1831年11月にストラスブール大学に入学したビューヒナーは、到着して間もない12月に当地で行われた政治的デモに加わった。それは、ロシアに対するポーランド国民の解放運動を指導した勇

士たちを歓迎するデモだった。七月革命の余波として起こったワルシャワ蜂起はヨーロッパの自由・民主主義者や革命家を熱狂させ、蜂起が失敗に終わり、その指導者たちが退去する際は、あたかも凱旋行進のように各地で祝賀された。ストラスブールでも、政府当局の妨害にもかかわらず学生が中心となって盛大な歓迎式が準備された。ビューヒナーはライン大橋のたもとで行われたその歓迎式の様子を両親に次のように報告していた。

（ジェノバの）ラモリーノ元帥がストラスブールを通過するようだと噂が広まると、学生はすぐさま集会を開き、旗をもって彼を出迎えようと決議しました。間もなく、ラモリーノは午後シュネーデル、ランジェルマン両将軍と共に到着するという報せが届きました。我々がただちに大学に集まって、城門を通過しようとする、旗をもっての通過を禁じた政府の命令を受けて、将校が兵隊を又銃線につかせ、我々の通行を阻止しようとはしました。しかし、我々は強引に通り返し、総勢300から400人でライン大橋のたもとに集結しました。国民軍も我々の側に加わりました。ついに多数の騎兵を引き連れてラモリーノが現れました。一人の学生が歩み出て、歓迎の辞を述べ、ラモリーノが応答、国民軍もこれにいらいます<sup>100</sup>。

### 3. ネルヴァルにおけるライン川とケール

ドイツの民主主義者が自由・平等の国フランスを憧憬してライン川を渡ってから数年後に、今度はフランスのロマン主義者が夢幻の国ドイツへの旅行を開始した。たとえば、ネルヴァル（Gérard de Nerval）は1838年に待望のドイツ旅行を果たした。彼の場合、早くも1828年にゲーテの『ファウスト』（第一部）の翻訳を行い、またパリに住んでいたハイネとも創作面で協力し合うなど、ドイツの文学や作家との深い関わりからドイツへの関心を募らせていた。ネルヴァルはストラスブールからラインの船橋（Schiffbrücke）を渡ってドイツに入るときの状況を次のように記した。

…セーヌぐらいの川幅のラインの最初の支流と、ポプラと白樺の緑の島とを越えると、その町（ストラスブール）は、地平線にのぞく鐘塔の石の先端によってかろうじてそうと知れるだけになる。そこではじめて足下に大きな河が流れているのが見える。流れは速く、泡だち、灰色の水面下に永遠の怒濤を運んでいる。ところで向こう側、向こうの地平線のほう、六十隻の舟を並べた動く橋を渡った所に何かあるとお思いだろう？…それこそドイツなのだ！ゲーテとシラーの土地、ホフマンの国。…一隻一隻が蛇の輪轡になって蛇行している橋に踏み出すには何かためらわせるものがありはしないだろうか。…そんなことを考えながらラインを越える。そこはもう対岸、すなわちドイツの国境である。まだ何ひとつ変わったものはない。向こうで税関吏と別れてきたが、こちら側でまたそれに出会う。ただ、フランスの税関吏はドイツ語を話し、バーデンの税関吏はフランス語を話すことだけがちがう。それは当然のことだ。ケールは、これまたまったくフランス的な小さな町である。わが国の国境に沿った外国の町はみな同じだ。ドイツの町を見たいのだったら、ストラスブールに戻らねばならない。

ケールには、それだけでなく、タバコ屋しかない。そのかわりあらゆる国のタバコがあり、「真正公社製」のパリ式に作られたフランスタバコもある。おそらく密輸品だろうが、ほかのものよりはるかに上出来である。ラベルも実に多種多様で面白い。しかし箱の中味は、一名「屑屋」と呼ばれる例の「兵隊タバコ」だ。したがってわざわざ密輸するには及ばない。

…ラインを見、ドイツの土地を踏んだあとで、…（ストラスブールの）町に戻るには城壁の木影の扉をくぐる。そこにはルイ十四世の太陽が、「あまねく公平に」光り輝いている。広場には、半ば軍隊風、半ば民間風の村がひとつすっぽり収まっている。二つ目の門を越えてストラスブールの市内に入ると、しば

らくは火薬庫の格子塀がつづく。そして、フランスに入ってくる外国人にとって、実際に恐るべき大砲の列がこれ見よがしに続く。おそらく、大小さまざまな六百門ばかりの大砲があるのだろう<sup>11)</sup>。

ネルヴァルはその旅行を自ら「感傷派の旅」と語っていたが、上記の紀行文には、初めてライン川を渡ってドイツの地を踏むときの興奮とともに、鋭い観察によって、ドイツの国境の町ケールの種々の特徴が的確に捉えられていた。そのなかでケールの文化的、経済的活動に影響を及ぼした要素として注目されるのは次の二つの特徴であろう。一つは、その町が国境に位置したがゆえに密輸に好都合であったという特徴。他の一つは、その町は古来、ラインの橋頭堡として重要な軍事的意味をもっていたために堅固な城塞に囲まれていたという特徴である。ちなみに、城塞については、ルイ十四世が領土獲得戦争を続けていた時期、城塞建築官ヴォーバン（Sébastien Le Prestre de Vauban）の指揮の下に独仏国境地帯にいくつもの要塞が築かれた。フランス国王がストラスブルクやケール、ブライザッハといったライン川沿いの地の確保に執着したのは、ハプスブルク家の包囲網を打ち破り、ドイツ諸侯に対して影響力をもつことを望んだからである。こうした背景から、ケールにもヴォーバンの設計によって1680年から1688年の間に「ケール要塞」（Veste Kehl）が築かれたが、それは19世紀まで存在した。ストラスブルクの歴史博物館（Musée Historique）には、（函館の五稜郭に類似した）「ケールの城砦」の模型が展示されている。

#### 4. 出版と密輸の町ケール：ポーマルシェの城塞内印刷所と出版事業

城塞が築かれたことによって、ケールは軍事的要地となり、オーストリア軍の頻繁な攻撃にさらされた。しかし、オーストリアとフランスの緊張関係が緩和したあと、兵士たちは撤退し、彼らに代わって城塞には肉屋、パン屋、飲食店主などが移り住み、活気ある商業の町が生まれた。そのために、バーデン辺境伯カール・フリードリヒは1774年にケールに都市権（Stadtrecht）を与えた。しかし、早くも1780年に、その城塞には200人もの印刷工が移り住むことになった。彼らはフランスの作家ポーマルシェ（Pierre Augustin Caron de Beaumarchais・1732-1799）の設立した印刷工場で働く職人であった。その印刷所は、間もなく「フランス印刷所」と呼ばれるようになり、以後11年間、つまりフランス革命の時代まで存在した。その間に、それは模範的な印刷工場へと成長し、当時の名高い文学愛好家を惹き付けた。そのなかには、プロイセンのハインリヒ皇太子、ヴェルテンベルクのカール・オイゲン公、オーストリアのフェルディナント大公などがいた。実際、その印刷所を1785年に見学した教育学者で作家のカンペ（Johann Heinrich Campe・1746-1818）は次のような感想を残していた。

製作方式で唯一無比のその印刷工場は、当初から昔の城塞の中にあり、建物全体が城塞になっていた。製作した本については、これより華麗で完璧なものはそれ以前にはなかったと思う。羊皮紙は雪のごとく白く、活字はまるで銅版画を彫ったようにくっきりと鮮明で、印刷インクは、これと比べたら他の黒インクはみなくすんで見えるほどだった<sup>12)</sup>。

ポーマルシェの印刷所で製作された本は、その当時すでに定評があったライプツィヒの書籍見本市に出品されたが、なかでも二つの全集が人々の注目を集めたという。それは、当時フランスで一部分しか出版されていなかったヴォルテールとルソーの著作であった。その出版は、

ヴォルテールと親交があったバーデンの辺境伯カール・フリードリヒが、社会批判を繰り返していたその思想家の著作出版と、企画を実行する印刷所の設立をポーマルシェに許可したことから実現したのであった。

ケールで印刷されたヴォルテール全集は最終的に72巻になり、ルソー全集は32巻になった。そして、そのヴォルテール全集はヴォルテールの最も浩瀚な全集の一つになった。ちなみに、18000通もの書簡を収めた巻は20巻に及んだが、そこにはプロイセン王フリードリヒ二世、ロシアの女帝エカテリーナ二世、哲学者ダランベールなど、当時の著名な人物と交わされた書簡が初めて紹介されていた。さらに、その全集には『ヴォルテールの生涯に関する回想録』など、初めて公表される著作も入っていた。そして各巻には、しばしばポーマルシェ自身が書いた序文、詳細目次、注が収められていた。その上、その全集には詳細な索引も加えられたが、その索引だけでも2巻に及んでいたという。

しかしながら、その全集の印刷が完了したあと、古来、ケールの負の特徴とも言えた密輸が開始された。つまり、それらの書籍は大きな箱に梱包されてライン川を越え、ストラスブルヘ行き、そこからパリへと運ばれた。1786年だけでもフランスの国境警備係は45トンの「紙の輸送」手続きを行い、その「紙の荷物」はわずか6週間でラインの橋を通過した。しかし、これは開始であり、それ以後も密輸は延々と続けられた。その際、荷物はすべて通過貨物として届け出られていたので、当時の法律に則って、警察による開封は免れていた。

その全集の出版は、文学界で「ケール版」(die Kehler Ausgabe)と称されて、後世に名を残すことになったが、事業としては失敗に終わり、ポーマルシェは破産に追い込まれた。彼のもっとも野心的な企画で、全財産をつぎ込んだヴォルテール全集は(当初、4000人の予約を見込んでいたにもかかわらず)ヨーロッパ全体で2000人の予約申込みがあっただけだった。パリのポーマルシェ邸は1792年に革命派民衆によって踏み荒らされたが、そのとき地下室には売れ残った「ヴォルテール全集」がうずたかく積まれていたという。

ケールの城塞内で18世紀に行われたポーマルシェの出版事業は、ケールがフランスの管轄下にあった1945年から1953年の間には、「ポーマルシェ通り」(Rue Beaumarchais)という道路名に名残をとどめていたが、現在ではもはやそれを思い出させる物は何もない。

## 5. ライン川をめぐる独仏の文学的抗争

ネルヴァルがドイツ旅行をした翌年の1839年に、ヴィクトル・ユゴーも長年の願望を実現させ、ドイツのライン川沿いの各地を旅行した。ユゴーは、ヨーロッパの大河ラインに早くから強い関心を抱いていたので、紀行文の冒頭で次のように語った。

あらゆる河のうちでも、わたしが好きなのはライン河だ。この河を初めて目にしたのは、一年前、ケールで浮橋を渡ったときのことだった。ちょうど夜になり、馬車は並足で走っていた。今、思い返せば、そのときこの古い河を渡りながら、一種畏敬の念に打たれたものだ。わたしはまえまえからこの河を見たいと願っていた。…この激烈ではあるが憤怒しているわけではなく、野性的ではあるが威厳をもそなえた、誇り高く高貴な河を、わたしは長い間見つめていた。河を渡るとき、ラインは満々と水をたたえて華麗だった。ラインはその鹿毛色のたてがみ、詩人ボワローの言う「その泥にまみれたひげ」を浮橋でぬぐっていた。兩岸は黄昏の中に沈んでいた。河音は力強く穏やかな唸りを上げていた。…この川はフランス的であると同時にドイツ的でもあるようなものにふさわしい、高貴な河なのだ。…フランスを躍動させるこの壮

大な波の中には、ドイツを夢想させるこの深いつぶやきの中には、この独仏二大様相の下で考察されるべきヨーロッパの全歴史が存在しているのだ<sup>13)</sup>。

ユゴーは、独仏の各個性を融合したライン川に早くもヨーロッパ的な意義を読み取った。しかし、ライン川に関する彼の理想的な解釈は、その翌年にライン川をめぐる生じた独仏の詩人の抗争にかき消されてしまった。フランス皇帝ナポレオン三世がバイエルンのプファルツとプロイセンのラインラントを要求したために、それらの地域で愛国主義の波が立ち現れたのである。まず、ラインラントの詩人ニコラウス・ベッカー (Nikolaus Becker・1809-1845) が1840年に「ラインの歌」(Rheinlied) を発表した。その「自由なドイツのライン川は彼らのものとはなるまいぞ」という詩行を繰り返す挑戦的な詩は、フランスの詩人たちに反発を招かずにおかなかった。そのなかには、ミュッセ (Alfred de Musset) やラマルチーヌ (Alphonse de Lamartine) もいた。たとえば、ミュッセはその翌年に「ドイツのライン、それは我らのものだった」という詩行を強調した詩で応戦した。

フランスに住んでいたドイツ人のなかには、そうした「ライン川をめぐる抗争」に対して冷静な対応を呼びかけた者が何人かいた。その一人としてアウグスト・W・ラーマイ (August Wilhelm Lamey・1772-1861) を挙げることができる。このあまり知られていない詩人はケールで生まれ、フランスで学んだあと、1816年からアルザスに住み、ストラスブールで司法官を務めるかたわら創作活動をしていた。彼はおもに戯曲はフランス語で、詩はドイツ語で書くというように、独仏の両言語で創作し、文字どおり自らの精神的基礎を独仏の両文化に定めていた。民主主義的かつ世界市民的な志操をもっていた彼は、ベッカーの歌に対して「抗争賛歌」(Streithymne) を発表し、それによって独仏の永続的な和解の展望を示した<sup>14)</sup>。

ラーマイがこの世を去った1861年には、彼の尊いヴィジョンが実現するかのようにもえた。つまり、その年にストラスブールとケールの間に鉄道橋 (Eisenbahnbrücke) が架設されたが、それは「融和の橋」(Brücke der Eintracht) と呼ばれ、独仏両国民を結ぶ絆として歓迎された。しかし、その橋の架設には両国の軍部の思惑も絡んでおり、戦時におけるその橋の「通行不能」の事態もすでに織り込まれていた。それゆえに、その鉄道橋は、慧眼の学者詩人リュッケルト (Friedrich Rückert・1788-1866) には、「融和」どころか、やがて起こり得る戦争を予感させた。彼は晩年に書いた詩のなかの一篇で早くもその予感を次のように表していた。

ケールのそばに架けられた融和の橋、平和の橋に用心せよ！

そこを渡ることに

用心せよ！真ん中で折れ砕け

半分はこちらのわれわれへ、あとの半分はあちらの隣人へ

引きちぎれる。共同の橋のこちら半分とあちら半分为確定し合い、

地下に（爆破用の）坑道を掘り、電線を張り巡らした。

こちらのゲルマンの端で、あちらのガリアの端で

岸辺は今にも火炎につつまれるだろう

そして、尊い鉄橋は木っ端微塵に吹き飛ぶだろう

隣人同士の方が、状況悪しき折りに

他方を訪問できぬように、と。

だから両国の融和の橋には（爆破用の）坑道が掘られている

まさに平和の橋は戦争を予告するものなのだ<sup>15</sup>。

こうしたリュッケルトの水を差すような詩句は、残念ながらやがて的中することになった。鉄道橋が架かって十年も経たないうちに独仏間に戦争が生じた。より正確に言えば、それ以後、約七十年の間に二つの大きな戦争が起った。ケールの鉄道橋と道路橋はそれらの戦争で破壊された。つまり、最初は 1870 年に、次は第二次世界大戦中に。それらの橋の基礎部分は今日でも現在の鉄道橋と道路橋の間に見ることができる。

## 6. 第一次世界大戦終結後のケール：戦争の犠牲者

第一次世界大戦が終結したとき、ストラスプールに暮らしていたドイツ人（約 4 万人）はフランスの勝利者に追い払われることになった。彼らはラインの橋に集まり、住民たちの嘲笑にさらされながらドイツ内地へ向かった。1933 年にフランスへ亡命したユダヤ系の作家デーブリー（Alfred Döblin・1878-1957）は、その時の混乱状況を小説『1918 年 11 月・あるドイツの革命』で次のように描いた。

このあたりで古きラインは広く、穏やかに流れていた。水量は豊かだった。頑丈な二つの橋が兩岸を結んでいた。対岸へ渡る道は遠くはなかった。しかし、今や、歩行者用の橋の入口を見ることはできなかった。橋の入口の道路は、人の群れでふさがっていた。とくに橋のたもとで黒山となっていた人間の群れで。通路を開けるために、人の群れがようやく排除された。狭い路地を数人の人が歩いているのが見えた。住民に追い払われていたのは、アルトドイツ 本国人であり、彼らは徒歩でケールへ向かっていた<sup>16</sup>。

「アルトドイツ 本国ドイツ人」（または「生粋のドイツ人」とは、普仏戦争でドイツが勝利し、ドイツ帝国領となったアルザス=ロレーヌにドイツ本国から移住してきたドイツ人をいう。彼らは当地ではアルザス=ロレーヌのドイツ人よりも社会的に優位な存在で、恵まれた生活を送っていた。たとえば、1883 年に帝国領アルザスのコルマルで生まれた詩人エルンスト・シュタードラーの場合、父親は南ドイツのゾントホーフ、母親はアルゴイ地方の出身だったので、いわゆる「アルトドイツ 生粋のドイツ人」として社会の上層部に入り込むことができた。しかし、そうした「アルトドイツ 本国ドイツ人」と親独的アルザス=ロレーヌ人は、1918 年にアルザス=ロレーヌがふたたびフランス領になったとき、たちまち当地から追い払われることになったが、その数は 112,000 人にのぼったという。

しかし、たとえ過去にそうする原因が多々あったにせよ、すべてのアルザス人がドイツ人に対してそうした行動をとったのではなかった。多くのアルザス人が戦争終結後の困難な時期に、彼らのドイツの友人を助けた。たとえば、シュヴァイツァー（Albert Schweizer・1875-1965）は、彼が記しているように、ドイツ側で不足していた食料品をライン川を越えて知人の所へと運んだ。

休戦およびその二年間というものは、私はライン橋の税関吏によく知られた顔になってしまった。私がしばしばドイツの飢えている知人に物資を届けるために、食料品をいっぱい詰めたリュクサックを背負ってケールへ出かけていったからである<sup>17</sup>。

シュヴァイツァーは上部アルザスのカイザースベルクに生まれ、1893 年にストラスプール

大学に入学して以降、(数年の中断はあったが)二十年近くをスラスブルで過ごした。そして、第一次世界大戦が終結したときには、すでにドイツ人として四十三年の生涯を経ていたので、休戦後もドイツ人への親愛の情が薄らぐことはなかったようである。実際、シュヴァイツァーについては、「彼が長年にわたって(ドイツ領の)スラスブルの精神的空気を吸っていた事実を知らなければ、真に彼を理解することはできない」<sup>187</sup>とされている。

1883年に上部アルザスで生まれた詩人ルネ・シッケレ(René Schickele・1883-1940)にとっても、1918年の休戦と、それに伴うフランスへの帰属変更は、彼の生涯で最初の大きな転換だった。休戦後にケールを訪れた彼は、(北アフリカ人も編入した)フランス軍隊にその町が警備された有様を目にした。そのとき、胸にこみあげてきたケールの歴史に対する同情を彼は次のように記した。

ケールは古来、痰壺(Spucknapf)であり続けた。ライン川沿いのこの国境の町はどうしてそうなったのか?しかし、この町にはいくつかの功績がある。かつて百科全書派の人たちが検閲を恐れ、著作を抱えてこの町へやって来た。

青色の制服を着た兵士が大勢いる。彼らは小ざっぱりして、悪気がない。私はそのモロッコ人兵士たちに笑顔で挨拶し、白人のカインの民族が罪もない人々を自分たちの戦争に巻き込んだことを詫言った。彼らの将校は短い髪に、制服を着て、車を乗り回していた<sup>188</sup>。

実際、ケールはドイツにとってはフランスへの突破口に、そしてフランスにとってはドイツへの突破口になっていた。それゆえに、昔からヨーロッパ諸国の抗争、とりわけ独仏の戦争に幾度となく巻き込まれ、容赦なく破壊された。こうした事情から、ケールは町として独自の発展を遂げることもできず、まさにヨーロッパの列強のナショナリズムの「痰壺」であり続けた。自らも生涯、アルザス人の運命に苦しみ続けたシッケレは、なおのことケールの数少ない過去の文化的功績に言及せずにはいられなかったのである。

同じく1922年に、ヘミングウェイ(Ernest Hemingway・1899-1966)は休戦後のヨーロッパの状況取材のために、スラスブルを経てケールを訪れた。彼はその「小さく、醜悪な町ケール」で超インフレに見舞われた市民の困窮について次のように報告した。

私たちはケールの鉄道駅でフランをマルクに替えた。10フランで670マルクが来た。…私たちはケールの大通りの縁にある果物の露店で最初の買い物をした。そこでは年とった婦人がリンゴ、桃、スモモを売っていた。良さそうなリンゴを5個選んで、50マルク札を出した。するとお釣りが38マルク来た。白い顎髭の人の好きそうな老紳士がそれを見ていて、帽子を取り、そのリンゴの値段を私に尋ねた。私が、お釣りを数えてから12マルクですよと答えると、その老紳士は苦笑して首を振り、自分には高すぎて買えない、と言った。

ヘミングウェイはまた、翌年の1923年に、パリからスラスブルを経て(ケールの東南14キロにある町)オッフエンブルクを訪れたが、その時期でもなおドイツへ入国する交通手段は整っておらず、次のような状況だった。

スラスブルからドイツへ入る列車は廃止になっていた。ミュンヘン急行、オリエント急行、プラハ行き直通急行は?すべてもう今はなくなっていた。赤帽の話では、スラスブルからライン川まで市街

電車に乗って、ライン川の架橋を歩いて渡ってドイツに入れば、そのケールからオッフエンブルクまでは軍用列車があるだろうということであった。…その市街電車は、ライン川に架かってドイツ領内に達している醜怪な鉄橋のたもとで止まった。そこでみなの人がどやどやと降りた<sup>20)</sup>。

## 7. ナチス治下のケール：ナチスゆかりの道路（広場）名

シッケレが見たモロッコ人のフランス兵は1930年にケールから立ち去った。しかし、早くも1933年に、新たな支配者としてナチスがケールに現れた。それに伴って、市内の道路や広場の名前はただちにナチ党と関係する人物の名前に付け変えられた。たとえば、ヒトラーの首相就任を祝して松明行列が行われた大通りは「アードルフ・ヒトラー通り」となり、駅前の広場は「シュラーゲター広場」(Schlageter=Platz)となった。ちなみに、シュラーゲター (Albert Leo Schlageter・1894-1923) は、第一次世界大戦が終結したあと、フランス、ベルギーの両軍がドイツの賠償不履行を名目にしてルール占領を開始したことに反発した、あの反共義勇軍に属していた。彼は鉄道爆破などを実行したために、1923年にフランス軍に逮捕され、死刑に処せられた。そのあと30年代に、彼は戦闘的な国家主義者として極右のアイドルになり、ドイツ各地にシュラーゲターを讃える記念碑が多数建てられた。文学界でも、ルール闘争でシュラーゲター集団の行ったテロに加わった作家キューケルハウス (Heinz Kükellhaus・1902-1946) は、自叙伝『稲妻型進軍の同志』(1931年)でシュラーゲターの活躍を描いていた。さらに、1933年にはヨースト (Hanns Jost・1890-1978) も戯曲『シュラーゲター』を発表したが、それは同年にドイツの1000以上の都市で上演されたという。そのなかにはケールも入っていた。

そのほか、現在のローゼンガルテン公園はヒトラーを首相に任命したヒンデンブルク大統領にちなんで「ヒンデンブルク広場」と名付けられた。そして、その公園の北を走る道路（現在のヘルマン・ディートリヒ通り）は、ナチの突撃隊長だったホルスト・ヴェッセルにちなんで「ホルスト・ヴェッセル環状道」となった。ちなみに、彼が作詞した歌は『ナチ党歌集』(1933年)の冒頭に収められ、突撃隊員に愛唱された。

さらに、流路の直線化工事が行われるまでは、蛇行していたライン川の水路だった「アルトライン」(Altrhein) 街区の道路はそれぞれ『ニーベルンゲンの歌』の登場人物にちなんで、グンター、ハーゲン、ジークフリート、ダンクヴァルト、ヒルデブラント、クリームヒルト、リュエディガー、エツェル、ゲレノート、ギーゼルヘル、ブルーヒルトと名付けられた。その場合、その英雄叙事詩はおもにヴォルムスが舞台になっており、ケールに由来する作品ではないことは一般によく知られていたが、中世ドイツ文学の民族的文化遺産を道路名によみかえらせることは、国威発揚のために有効と考えられた。ちなみに、ゲッベルスは映画『ニーベルンゲン』について、「この映画の運命は現代のものではありません。しかし、きわめて現代的で、きわめてアクチュアルなので、国民社会主義運動の戦士をも内心から揺り動かした。その証明はテーマそのものにあります」<sup>21)</sup>と語っていたという。それゆえに、それらの道路名は、ケールがフランスの管轄下にあった1945年から1953年の間、ロンサール、ラブレ、ラシーヌ、モリエール、デカルト、ラ・フォンテーヌなど、フランスの文学者の名前に変えられた。

しかし、ケール市内の道路（広場）名で繰り広げられた独仏の政治的対抗のみならず、何度か戦禍を被ったケールのライン川に堆積した民衆の苦難と怨念の歴史、血の悲劇はまさに『ニー

ベルンゲンの歌』を彷彿させるものと言えた。それゆえに、シッケレはこの地域のライン川を「幽霊のごときライン」(Gespenstischer Rhein) と捉え、次のように述べた。

ここではなお、この川はニーベルンゲンのラインである。日没の黄金の宝をことごとくその豊かな流れに抱き入れる夕方でさえも薄暗く、ラインは深い孤独のうちに流れている。色とりどりの旗が飾られ、音楽がながれる観光船など、ここではまったくの場違いだろう。ラインの歌声は、陽気な酒飲みの喉をしめつけるだろう。その兩岸はまさに監獄の塀である。その中へラインの流れは導かれた。だが、塀のむこうには、(蛇行した旧流路の名残の) 三日月湖のジャングル、鬱蒼とした原生林が広がり、どんな監視装置を設置してもラインの流れを読み取ることはできないだろう。それゆえに、その陸地には、なおもラインの流れを制する壘塀が造られているのだ<sup>22)</sup>。

ちなみに、そのアルトライン街区の本通りは現在も「ニーベルンゲン通り」(Nibelungenstraße) という名前になっている。

## 8. ケールとストラスブールの反ナチ集団

1933年にヒトラーが政権を掌握したあと、多数のドイツ人がフランスへ逃亡するために、(多くは汽車で) ケールを通り過ぎた。ハインリヒ・マン (Heinrich Mann) も同年2月21日にケールを通過した。さらに、1938年のオーストリア併合のあとには、また新たな逃亡の波がケールの橋を越えた。

ストラスブールのジャーナリストのなかには、そうした逃亡者たちに仕事を世話し、経済的支援をした者がいた。しかし、その支援はナチス・ドイツから手痛い仕打ちを受けることになった。1933年3月28日にケールのライン橋のもとに大きな立て看板が現れた。それは「ブツクリスト」で、そこにはアルザスの「裏切り者」の名前が書かれ、彼らに宛ててドイツ滞在を禁ずる旨が告げられていた。そのなかには、当時の『デルニエール・ヌーベル・ドゥ・ストラスブール』(Dernières Nouvelles de Strasbourg) 紙<sup>23)</sup>の主宰ジャン・クニッテル (Jean Knittel)、そして『レピュブリック』(République) 紙<sup>24)</sup>の発行者リュシアン・ミンク (Lucien Minck) と編集主幹フレデリック・ヘッカー (Frédéric Hecker) の名前があった。

なお、ケールにも共産主義を信奉する者が何人かいた。彼らはヒトラーの首相就任を祝う松明行列が行われた翌日に、その同じ通りで反対行進をした。当然ながら、彼らに対する弾圧はその後、次第に強くなったが、一年ほどの間はなおさまざまな抵抗集団が存在した。そして、それらの集団は、とりわけストラスブールにいたドイツ人亡命者から支援を受けていた。

その当時、ストラスブールにいたドイツ人亡命者のうち、ゲオルク・ラインボルト (Georg Reinbold・1885-1946) は、一人のアルザス人と共同で書店を営んでいた。彼は1933年まではバーデンのSPDの議長で、カールスルーエの州議会では副議長を務めていた。1933年、彼はヒトラーから逃れるためにスイスを経由してストラスブールへ来た。そして、ストラスブールで密かにナチに対する抵抗手段を練っていた。ラインボルトも他の亡命者と同様に、ヒトラーは長く続かないだろうと考えていたので、ストラスブールではいわば最前線で闘う意志を表明していた。彼は自分の書店を通じて、ドイツで発禁になっていた本や雑誌、とりわけ早くから普及していた「亡命者新聞」を、ケールの共産主義集団の協力のもとにドイツ国内へ広めた。

ラインボルトのほかにもドイツから亡命した反ファシズムの知識人として、ハインリヒ・ブ

ラントラー（Heinrich Brandler・1881-1967）、タールハイマー（August Thalheimer）、ハンス・マイヤー（Hans Mayer）がストラスブールで活動していた。この三人は1933年から1934年の間、ストラスブールの共産党の市長ヒューバー（Charles Hueber）と同盟を結ぶ方策を探りながら、（おもに地方新聞『新世界』<sup>デー・ノイエ・ヴェルト</sup>の編集を通じて）反ヒトラーの運動を展開していた。

## 9. ケールでのナチの焚書

1933年5月10日にベルリンで行われた「大焚書」のあと、ケールでも約1ヶ月半後の6月26日に「非ドイツ精神排撃・闘争委員会」の下で焚書が行われた。焚かれた作家たちのなかには、ストラスブールやフランスについて書いた作家が何人も含まれていた。たとえば、小説『1918年11月・あるドイツの革命』でストラスブールの兵士評議会とフランス軍を好意的に書いたユダヤ系の作家デーブリン、そしてエラスムスやマリ・アントワネットのストラスブール滞在、『ラ・マルセイエーズ』の作詞作曲者ルジェ・ド・リール（Rouget de Lisle）について書いたツヴァイク、またドイツ人ジャーナリストのヤーコプ（Berthold Jacob・1898-1944）の尽力でストラスブールの亡命者強制収容所から釈放された左翼リベラリストのオシエツキー（Carl von Ossietzky）、そしてユダヤ系の反ナチ作家フォイトヴァンガー（Lion Feuchtwanger・1884-1958）、さらにナチにとって厄介な存在だった表現主義の作家エートシュミット（Kasimir Edschmid・1890-1966）などであった。

ちなみに、オシエツキーはヒトラーの政權掌握後も亡命を拒み、最初の強制収容所送りの一人として逮捕されたが、ドイツ軍国主義を非難し続けた。それゆえに、彼に1936年にノーベル平和賞が授与されたことは、ナチスを非常に憤慨させた。そして、エートシュミットは作品が「ユダヤ的表現主義」として攻撃されたあと、イタリアでの創作活動に活路を開いたが、やがて講演やラジオ出演なども禁止され、1941年からは創作活動全般を禁止された。

しかしながら、とくにケールでの焚書は、ストラスブールで活動していたドイツ人亡命者や親仏家に対する「見せしめ」の意味もっていたので、ナチスには手を緩めず、強化すべき政治宣伝の行為にほかならなかった。

さらにまた、1938年11月にドイツ全土で吹き荒れた反ユダヤ主義の嵐は、ケールでも「ユダヤ人迫害」のおぞましい光景を展開したが、これについては本稿では（紙幅の都合から）省略せざるを得ない。

## 10. ケールにおける「独仏の演劇戦争」

1933年、ケールに「ドイツ劇場」（Deutsche Bühne）が開設された。それはゲッベルスによってストラスブールのドイツ人「亡命者劇場」（Emigrantentheater）に対抗するために創られた。つまり、アルザスが1918年にフランス領になって以降、ストラスブールでは——それ以前と同様に——定期的にフランス語の芝居が上演されていた。無論、ドイツの劇団もストラスブールで従来と同様に公演を行っていた。しかし、1933年4月、ストラスブールの「市立劇場」でナチに言語統制されたフライブルクの劇団が公演を行おうとしたことから、問題が生じた。それを契機に、ストラスブール市は以後、ドイツの劇団の公演を禁止した。つまり、独仏の演

劇戦争が勃発したのである。こうした事情から、ゲッベルスはストラスブールと真向かいのケールに「ドイツ劇場」を開設することを決心した。そして、その劇場で上演する作品としては、ストラスブール市民の関心を惹くものが意図的に選ばれた。これに対抗して、ストラスブールでも「ドイツ劇場」を開設することが要求された。その当時、ストラスブールにはヒトラーから逃れて来たドイツ人がかなり多くいたが、そのなかには演劇人も何人かいた。彼らはただちに「ストラスブール亡命者劇場」(Straßburger Theater der Emigranten)を設立した。その劇場を指導したのは、当時よく知られていた作家のマス(Joachim Maass・1901-1972)であった。そして、その劇場では早くも1933年7月に公演が行われた。そのときの演目はドイツ語表題で『無名兵士たちの墓標』となっていたが、それはフランスの劇作家で平和主義者のポール・レナル(Paul Raynal)が1924年に発表した反戦的作品であった。その公演は成功し、それに勇気づけられたマスは市長のヒューバーに対してその劇場をストラスブール市の「ドイツ劇場」にすること、そしてその使命を第三帝国で禁止されている作品の上演とすることを提案した。しかし、ヒューバーは、親独的傾向を強めていた自治主義者の妨害を案じて、マスの提案を退けたのだった。

ゲッベルスの開設した「ドイツ劇場」では、カールスルーエとバーデン＝バーデンの劇団が交互に公演を行った。最初にカールスルーエの劇団によって上演されたのは、クライストの愛国主義的な作品『ヘルマンの戦い』であった。本来、クライストはナチに歓迎された作家ではなかった。実際、表現主義の何人もの作家を顕彰していた「クライスト賞」やクライストの作品の愛読会「クライスト協会」は、ナチによってすでに早い時期に禁止されていた。しかし、西暦9年に2万のローマ軍をトイトブルクの森で撃退し、それによって古代ゲルマニアの基礎を築いた領主ヘルマンを主人公にしたその劇は、「ローマ支配からゲルマニアを解放する」という主題に「ナポレオン支配からドイツを解放する」という民族的願望を反映していたので、ナチの政治宣伝には都合のよい作品だった。それゆえに、その作品が1933年から1934年の間に独仏国境のケールで上演されたことは、危険をはらんだリアリティーを少なからず暗示していた。あきらかにフランスはドイツの復讐戦争に脅かされることになったが、実際、それは数年後に現実となったのである。さらに言えば、その作品の主人公ヘルマンは英雄とは言い難く、むしろ妄想に駆られた言動、謀略への執着、復讐に燃えた残忍性などからきわめて問題的人物と言えたが、上演に係わっていた演劇人たちには、そうしたことは一向に気に掛からなかったようである。

## 11. 第二次世界大戦後のケール

1933年にストラスブールを訪れたカネッティ(Elias Canetti・1905-1994)は、大聖堂の上からシュヴァルツヴァルトとヴォージュ山脈を眺めたときに覚えた不安に関して、後日、「その年も、ドイツとフランスの間にかに深い溝があったか、私は思い違えていなかった。十五年前に終結した戦争がまだ心に重くのしかかっているというのに、もう次の戦争が間近に迫っているのを感じたのだ」<sup>25)</sup>と語っていた。実際、ストラスブールと同様、ケールも独仏の「火薬庫」であり、いつ火を噴くとも知れぬ危機につねに脅かされていた。そうした状況において、ケールは第二次世界大戦中の1942年に「大ストラスブール」(Groß-Straßburg)へ併合された。終戦後にフランスがケールを要求したとき、フランスはケールがストラスブールに併

合していた事実を根拠に挙げていた。フランスの要求はアメリカとイギリスの反対によって取り下げられたものの、結局、ケールは数回に分割して新生ドイツ連邦共和国（西ドイツ）に返還されることになった。

独仏の対立抗争に生涯、苦しみ続けたシッケレは、両国を結ぶライン川にこそヨーロッパの平和を確立する可能性があることを早くから認め、それを「ライン精神」として訴えた。

ラインの右岸と左岸の地域は、ちょうど開かれた本の二つの頁のようである。その間を流れるライン川はその両頁の溝となって二つの頁を結び合わせている。一方の頁は東方を指し、他方の頁は西方を指している。その間を南から北へと流れるライン川は、それ自体のなかに東方からの水と西方からの水を含み、一本の大きな流れとなって海へ注いでいる。そして、この海は人類の若者たちの住む偉大な半島を、つまりヨーロッパを包囲している<sup>26)</sup>。

しかし、シッケレが追い求めたヨーロッパ統合のヴィジョンが具体的な形を見るまでには、不幸なことに第二次世界大戦を経なければならなかった。終戦後、その深い傷跡を早期に修復すべくあらゆる努力がなされた。1949年にストラスブールに欧州評議会が設置され、翌年の1950年にはヨーロッパ石炭鉄鋼共同体（Europäische Gemeinschaft für Kohle und Stahl）の創設が提案され、そのEGKS設立条約（パリ条約）は1951年に独仏を含む六カ国によって調印された。ドイツの作家ケッペン（Wolfgang Koeppen・1906-1996）はちょうどその時期に、ふたたび架設されたケールのライン橋を渡った。そのとき彼は、ライン川の関税吏の和やかな表情と行き交う貨物船の軽快な滑走に「ヨーロッパの覚醒」の兆候を認め、新しいヨーロッパのなかで復興するケールの姿を次のように記した。

旅券検査員と関税吏が車で入国しようとする者たちになにかに近づき、軽く息をつき、残った手続きを詫びながら片づけた。彼らは統一ヨーロッパのことをそれ以前に聞き知っていた。彼らはヨーロッパ共同市場に関してすでに指示を受けていたのだった。彼らは危機に瀕した未来か、または輝かしい未来を考えていたのだろう。ライン川のこちら側とあちら側の死者のことは忘れられていた。遮断棒が古くさい時代遅れの物体のように聳えていた。ケールの橋はたしかにヨーロッパ石炭鉄鋼共同体の絆を強めた。川面を石炭を積み込んだ船が鉱山から鉱山へと、うずたかいぼた山から石炭山へと、さながらトランプのパバ抜きゲームで人々の間を行き交うパバ札のように、川を上り下り、走り滑っていた<sup>27)</sup>。

実際、独仏国境の町ケールは、過去300年の間に14のさまざまな戦争に巻き込まれ、破壊され、7回も所有者が変わった。こうした理由から、ケールは町として独自の発展を遂げることができなかった。それゆえに、市内には旅行者の興味をとくに惹くような史跡や名所が存在することもなく、おもにストラスブールへ向かう旅行者の通過地点という地位に留まっている。このような状況はケールにかぎらず、一般に国境沿いの都市、町、村に共通する姿かもしれない。しかしながら、数々の歴史的苦難をくぐり抜け、複雑な文化的問題と闘ってきたケールについての考察から、少なくとも次のような傾向を認めることができるだろう。つまり、領土的境界とはおもに地理や歴史、あるいは宗教に関係するがゆえに、政治的には重要視されるものであるが、民衆の意識や文化的、経済的活動ではかならずしも絶対視されるものではない。それはしばしば人間の交流や文化活動においてその限界を越えて流動し、境界に備わったさまざまな要素と機能を融合して創造的な糧へと発展し得るのである。

## 註

アルザスの地域、都市名については、フランス領ではフランス語読み、ドイツ領ではドイツ語読みで表すのが、適切と思われるが、本稿では両言語の頻繁な交替によって混乱が生じるのを案じて、現在のフランス語読みを採った。

- 1) Meyers Großes Taschenlexikon, Bd.11. Mannheim 1987, S. 272.
- 2) アルザスの北部と南部にあるライン橋としては、バーデン=バーデンからアルザス北部のアグノーに向かう橋と、フライブルクから古都コルマルに向かう橋がよく知られている。
- 3) Woltersdorff, Stefan : Straßburg für Leser. Kehl 2000.
- 4) Goethe, Johann Wolfgang : Sämtliche Werke, Bd.14. Frankfurt a. M. 1986ff, S.396.
- 5) Zweig, Stefan : Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurt a. M. 1981ff.
- 6) 鯖田豊之著『ラインの文化史』刀水書房 1995年、62頁参照。
- 7) Börne, Ludwig : Werke in 2 Bänden, Bd.2. Berlin (Ost) / Weimar 1986, S.8f.
- 8) Heine, Heinrich : Sämtliche Schriften, Bd.VI/1. München 1997, S.459f.  
 なお、井上正蔵著『ハインリヒ・ハイネ』（岩波新書・1969年）iii頁では、ハイネ年譜の不正確が指摘され、ハイネの1831年の5月1日のフランス入国は疑問視されているが、本稿では原文に記された日付のままにした。
- 9) Bock, Hildegard und Heinrich : Literaturreisen Straßburg und das Elsaß. Stuttgart / Dresden 1993, S.19.
- 10) Büchner, Georg : Werke und Briefe. München 1980.
- 11) ジェラルド・ド・ネルヴァル（篠田知和基訳）：『ローレライ』思潮社 1994年、21～25頁。
- 12) Woltersdorff, Stefan : op. cit. S. 196.
- 13) ヴィクトル・ユゴー（榎原晃三訳）：『ライン河幻想紀行』岩波文庫 2000年、8～9頁。
- 14) Killy, Walther : Literaturlexikon (Digitale Bibliothek). Berlin 2000, S.11366f.
- 15) Woltersdorff, Stefan : op. cit. S.190.
- 16) Döblin, Alfred : November 1918 — eine deutsche Revolution, Bd.1. Olten 1991, S.343.
- 17) Schweizer, Albert : Gesammelte Werke in 5 Bden, Bd.1. München 1974, S.192.
- 18) Rehm, Max : Straßburgs geistige Luft um die letzte Jahrhundertwende, Bad Neustadt 1982. S.11.
- 19) Schickele, René : Werke in 3 Bden, Bd.3. Köln / Berlin 1959ff, S.494.
- 20) Hemingway, Ernest (Michael Tocha 訳) : „Geldmachen in Kehl“
- 21) 平井正著『ゲッベルス』中公新書 1991年、153頁。
- 22) Schickele, René : op. cit.
- 23) この新聞は1877年に当時の「帝国領アルザス=ロレーヌ」で創刊されたときは『シュトラースブルガー・ノイエステ・ナーハリヒテン』と称したが、1918年以降、(フランス語版も発行されるようになり)この名前になった。なお、この新聞は第二次世界大戦後からは、今日の『デルニエール・ヌーベル・ダルザス』という名前になった。
- 24) 『レピュ』とも呼ばれたこの新聞は、紙名はフランス語だが、ドイツ語表記の日刊紙だった。1918年から1925年までは、ダレ (Camille Dahlet) が主導し、文芸欄はシッケレが担当していた。ダレはシッケレのかつての友人であり、シッケレの小説『ヴォージュの眺め』(1927年)にはダレが「フランシス・ケルン」という名前で登場している。ダレはフランスのアルザス政策に批判的であったために、1925年に解任されたが、それ以降この新聞の発行部数も急激に減った。なお、『レピュブリック』紙はファシズムと鋭く対決したので、ヒトラーが首相になって数日後にドイツで発禁になった。この新聞へは、次のようなドイツ人亡命者が協力した。マース (Joachim Maass)、ヘーゲマン (Werner Hegemann)、ヨーエル (Hans Theodor Joel)、ロート (Ernst Roth)、ヴェールレ (Oskar Wöhrle)、ファルク (Ernst Falk)、キッシュ (Egon Erwin Kisch)、そして今日、残念にも忘れられてしまったヤーコブ (Berthold Salomon Jacob・1898-1944)。

- 25) Canetti, Elias : Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931-1937. München 1985, S.70.
- 26) Bentmann, Friedrich : René Schickele. Leben und Werk in Dokumenten. Nürnberg 1976, S.148.
- 27) Koeppen, Wolfgang : Reisen nach Frankreich. Frankfurt a. M. 1979, S.8f.